

安積中高一貫校整備事業基本・実施設計業務 公募型プロポーザル審査講評

1 審査経過

本事業の基本・実施設計業務に係る公募型プロポーザルでは、各分野を代表する8名の審査委員による審査委員会により、募集要領の策定から最終審査に至るまで、慎重かつ厳正な審査を行いました。

(1) 第1回審査委員会

日程：令和3年6月9日（水）

場所：安積歴史博物館会議室（福島県郡山市）

内容：① 委員長及び副委員長の選出
② 基本計画等の確認
③ 募集要領及び審査スケジュール等の決定

(2) 第2回審査委員会

日程：令和3年8月30日（月）

場所：杉妻会館中会議室（百合）（福島県福島市）＋オンライン

内容：二次審査対象者の選定等を行いました。

まず、技術提案書の提出のあった全25者について、参加資格を有すること、及びその技術提案書について、記載内容や表現方法が作成上の留意事項に適合しないなど、失格条項に抵触するものが無いことを確認しました。

その後、事前投票結果を参考に各委員が所見を述べて意見を交換し、それを踏まえて各提案を再評価したうえで協議を行い、10者に絞り込みました。

さらに、絞り込まれた10者について、改めて同様に協議を行い、二次審査に招聘する6者を選定しました。

(3) 第3回審査委員会

日程：令和3年10月11日（月）

場所：ラコパふくしま会議室AB（福島県福島市）

内容：二次審査対象者へのヒアリング及び最優秀者等の選定を行いました。

まず、第2回審査委員会にてヒアリング対象に選定した6者による、プレゼンテーション（各15分）及び質疑応答（各20分）を実施しました。

その後、各委員がヒアリングを踏まえた全体的な所見を述べた後、選定にあたってのポイントごとに各提案の対応状況を整理しながら、提案の優劣を協議しました。

最終的に、票決により、最優秀（設計委託候補者）1者及び次点1者を決定しました。

審査委員会の構成（敬称略）

委員名	職名	備考
小野田 泰明	東北大学大学院工学研究科教授	委員長
速水 清孝	日本大学工学部建築学科教授	副委員長
佐藤 玲子	株式会社佐藤信博建築設計事務所	
福地 裕之	福島市立福島第四中学校長	
鈴木 芳人	福島県立安積高等学校長	
田母神 秀顕	福島県土木部営繕課長	
平澤 洋介	福島県教育庁高校教育課長	
渡邊 昌明	福島県教育庁財務課施設財産室長	

2 審査結果

（1）最優秀者

株式会社千葉学建築計画事務所（受付番号 14）

（2）次点優秀者

NASCA+partners 設計共同体（受付番号 1）

（3）その他の二次審査対象者（受付番号順）

- ・株式会社小堀哲夫建築設計事務所（受付番号 4）
- ・八板建築設計事務所・濱田慎太建築事務所設計共同体（受付番号 5）
- ・ラーバンデザインオフィス+サイドバイサイド設計共同体（受付番号 12）
- ・飯田善彦・佐久間宏一設計共同体（受付番号 19）

3 審査講評

（1）全体講評

本プロポーザルで求めた提案課題は、次の 6 題でした。

- ・既存学校施設との連続性や一体性、交流等に配慮した施設
- ・主体的かつ対話によって深い学びを実現できる施設
- ・中学生と高校生が共に学ぶ空間を実現する施設
- ・長寿命化を図るため、ライフサイクルコストの縮減や維持管理の容易性及びニーズの変化に伴う可変性に配慮した施設
- ・安積歴史博物館等との景観に配慮した施設
- ・その他、本施設の計画において特に重要と考える事項

ヒアリングを要請した提案は、いずれも既存学校施設との連続性、主体的な学び、中学生と高校生の交流、ライフサイクルコスト、さらには安積歴史博物館との関係性に対する工夫が凝らされ、安積中高一貫校の将来の教育に可能性を感じるものでした。特に、対話による深い学びや安積歴史博物館との関係は、各案共に独創的な発想によるものでした。

最優秀の提案は、そうした中にあっても特に独創的でありながら、中学生や高校生の学びについて細かい所にも配慮がなされつつ、維持管理の面でも十分に検討されたもので、総合的な観点から高く評価されるものでした。

(2) 個別講評（二次審査対象者）

各審査委員の評価・意見をまとめて、二次審査の対象となった各者の提案内容を、個別に講評します。

○ 最優秀者：株式会社千葉学建築計画事務所（受付番号 14）

この提案を特徴づけているのは、安積歴史博物館（以下「歴史博物館」）の断面形に関係づけられた壁面が、空間構成の主要要素として取り込まれているところです。一見、特異に見える対応ですが、大きなボリュームの中に、分節化された小部屋を市松状に埋め込む構成は、施設に要求される集団学習、少人数指導による学習、個別学習といった学習単位において柔軟に対応できる設定となっています。また、維持管理の面でも、将来的な設備機器の更新を容易にするルート設定など、十分な検討が加えられた提案であり、市松状に再構築された歴史博物館に面するファサードなどと合わせて、秀逸なアイデアの中に複合的な要素の整合が図られていることが高く評価されました。

平面計画においても、歴史博物館を望むよう北側に図書室を配置し、様々な規模の学習に対応できる場として設えられ、多様な学びの起点となることが期待できるものとなっています。フロアごとにまとめられたプランニングは、管理を容易にする一方で、視線は立体的に交錯するといった複雑さが内包されており、生徒の主体的な学びを啓発する効果も期待できます。

ランニングコストの増大が懸念される大規模な吹き抜けを抑制しつつ、歴史博物館との連続性を十分に意識した空間構成となっており、設計者の高い練度が感じられます。

CLT と RC 造を一体化させる構造のアイデアは、現段階で可能な検討を経た真摯な提案であることは理解できますが、ウッドショックを見据えた市場の見極め、ディテールを含めた技術的な検討、定められたコストと期間の中で調達可能なファブの選択など、設計の中で様々な整理が必要であると思われます。適切なコミュニケーションを通じた、建設的かつ柔軟な対応を期待します。

○ 次点優秀者：NASCA+partners 設計共同体（受付番号 1）

二階に設けられた図書空間が、気持ちの良い吹き抜けによって三階の教室群と緩やかに繋がられ、エントランスの近傍にある階段状の大講義室が、地上階と二階を統合する役割を併せ持ち、明快な平断面計画によって全体が統合されている優れた提案です。ワークスペースとクラスルームが適切に組合せられた教室周りや、多様なスペースが連坦する図書館なども、多様な学びや交流への配慮が感じられます。歴史博物館に対しても視覚的に開かれた構成となっており、二つの建物を関係づけようとする設計者の意図も伝わってきます。

室内環境的には、ソーラールーフや集熱ダクト、ライトシェルフなどを導入するなど丁寧な配慮が見られるとともに、東京と地元の設計事務所の協働体制についても相補的な設定となっており、シナジー効果を期待できる優れたものと評価されました。

一方で、分節化が図られているとはいえ、大きな空間構成となることによる空調コスト、さらには音や外光のコントロールなどの与件については、さらなる配慮が必要であると思われます。また、大きく曲線状に張り出した一階の軒と強い軸線でまとめられた天井面との関係など、設計者の意図が読み取り難い部分も見受けられました。全体的に完成度の高い優れた提案であり、最優秀案との差は僅かであると考えられますが、こうした懸念が積み重なり、残念ながら次点の評価となりました。

（以下、受付番号順）

○ 株式会社小堀哲夫建築設計事務所（受付番号 4）

階段状に展開するラーニングスペースが、一階から三階までを統合する明快な空間構成を持つ校舎となっています。この提案が秀逸な所は、そうした空間のアイデアを学びのストリート、学びのステップと名付け、自ら学び、チームで共有・発展させる空間として、丁寧に設えられているところです。知的創造性を支援する空間を実際に設計した経験に支えられた提案内容は、本校が必要としている機能要求に応えるもので、好感を持って受け取られました。

その一方で、階段状にすることによって難しくなる各フロアへのアクセスの確保などについて、もう少し練度が求められること、大空間であることによる空気質や音の管理についても懸念が残ります。そうした課題に対して質疑が上がりましたが、限られた時間内で不安を解消する回答を得るには至りませんでした。

○ 八板建築設計事務所・濱田慎太建築事務所設計共同体（受付番号 5）

環境の良い南側に屋外の大階段とテラスを設えて、各空間がそこに接続されるように調整された明快な空間を構成する提案です。図書館と大講義室を連結させて作り上げた地上階のイノベーティブセンター、二階の特別教室群を繋ぎ合わせたコラボレーションコアなどの考え方は、本事業に求められる学びの空間を適切に理解したものであるとして評価されました。

その一方で、歴史博物館との関係については、一体的なボリュームとして扱おうとする設計者の意図と、法規的に求められる離隔距離との相反する現実を止揚する見解をヒアリングで得ることができず、その先の評価に繋がるのが困難となりました。

○ ラーバンデザインオフィス+サイドバイサイド設計共同体（受付番号 12）

大きな吹き抜けを持つラーニングセンター棟と、中学生の拠点となる普通教室棟を分け、渡り廊下でそれらを繋ぐ提案であり、スケールを分節した校舎配置の可能性を提示したことに加え、管理イメージが付きやすい点で評価を集めました。

その一方で、教室群とラーニングセンターを分けることが、他案で試されているような両者の間での相互浸透を起こりにくくしていることが、二次の提出書類によってより懸念される結果となり、残念ながらそれ以上の評価を得ることはできませんでした。

○ 飯田善彦・佐久間宏一設計共同体（受付番号 19）

他の校舎を含んだ全体のマスタープランを、時系列で検討する中で導き出された「思索の道」を背骨とする、明確な空間構成を有する提案です。この道が、二階に設けられた特別教室と学習ゾーンを縦断し、上階の教室群、下階の大講義室などに連結される展開は魅力的で、説得力を持つものでした。また、RC造のコアが大空間を分節する構造の考え方も十分に考察されたものとなっています。

一方で、多様な学びのための空間の設定や、歴史博物館との調和といった課題においては、他の案との比較における優越性を見出し難いという意見もあり、それ以上の評価を得ることはできませんでした。

4 最後に

本プロポーザル募集要領の冒頭でも述べたように、県内屈指の進学校である安積高等学校を中高一貫校化する安積中学校・高等学校（仮称）は、生徒の興味や関心、進路希望の多様化、教師と生徒の対話を重視する学習形態の双方向化などの教育ニーズの変化や、AI技術の進歩などの社会背景による教育改革が推し進められる中で、21世紀における本県の初等中等教育の方向性を示す、先導的役割が期待される施設です。

選ばれた設計者には、生徒や教職員はもちろん、地域住民や有識者など、幅広い分野の方々と真摯に対話を重ねることを通じて、「国内外に通用するトップリーダーの育成へと繋がる教育活動の実現」といった、本施設が掲げる高い目標の達成に向けて、建築の側面からの十分な支援を望みます。

最後に、設計者選定プロポーザルは、参加者の理解と貢献によって成立する事業です。当委員会が掲げた提案課題に対して真摯に向き合い、自由な発想で多様なアイデアを寄せていただいた25者の提案者に対し、審査委員一同、心から敬意と感謝の意を表します。

令和3年12月23日

安積中高一貫校整備事業基本・実施設計業務公募型プロポーザル審査委員会